

IPhO2022ベラルーシ大会の中止と代替スイス大会の開催

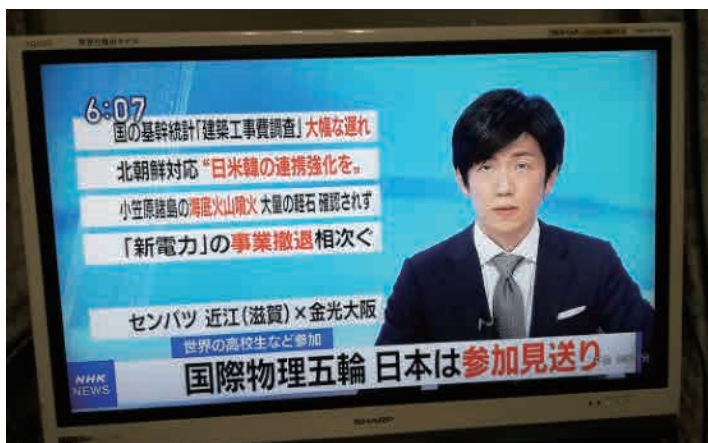


物理オリンピック日本委員会理事長
長谷川 修司

2022年2月20日に閉幕した北京冬季オリンピック直後の2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。それに対する多くの国からの批判を受け、3月4日の北京冬季パラリンピックの開会式の前日、国際パラリンピック委員会(IPC)は、ロシアとベラルーシを北京冬季パラリンピックから排除することを決定し、北京に到着していた両国の選手たちを直ちに帰国させた。その時にはこの劇的な状況を他人事のように見ていたが、半月後には国際物理オリンピック(IPhO)にも広がってきた。

IPhO2022ベラルーシ大会への不参加の決定

ベラルーシの協力によってロシアのウクライナ侵攻が長引くなか、3月後半に入ってIPhO国際役員たちのメールにベラルーシ大会ボイコットの意見が流れた。われわれ日本委員会(JPhO)は、ベラルーシ大会参加登録の締切が4月1日に迫るなか、参加すべきかどうか議論を始めた。ヨーロッパの何人かのIPhO関係者から情報を得ると、ドイツをはじめとする複数の国がベラルーシ大会をボイコットすることを決めていることを知った。そんななか、3月22~23日にかけて、東京都八王子市の大学セミナーハウスにおいてチャレンジファイナルを実施し、IPhOおよびアジア物理オリンピック(APhO)に派遣する日本代表選手を選抜する最終試験を行った。3月28日にJPhO事業推進会議を開催してIPhO/APhO日本代表選手5名/8名を決定した。しかし、その同じ会議で、IPhOベラルーシ大会を認めないこと、日本は参加しないことも決定した。JPhOからの発表の前に、同日夕方、NHK総合ニュースで報道されてしまい、JPhOからの告知が遅れてしまったが、3月30日にホームページ上で公開した：http://www.jpho.jp/2022/20220330-Non-participation_IPhO-Belarus.pdf。この決定は、今年の



3月28日のNHKニュース(NHKの許可を得て掲載)

物理チャレンジ2021から始まって半年以上の長い期間、研修と選抜を経て日本代表選手に選ばれた生徒たちの努力を思えば、まさに苦渋の決断であった。しかし、理不尽な軍事力行使によって何の罪もないウクライナ国民を苦しめているロシアとベラルーシ政府に対する我々の強い憤りを示すべきとの意見で一致した結果であった。

IPhO2022ベラルーシ大会の中止

4月3日(日)、日本時間の午後8時からIPhO臨時国際役員会議がオンラインで開催され、ベラルーシ大会の開催の是非を議論した。55か国から各国2名ずつ、計110名の役員が出席した。日本からもJPhO理事長と国際物理オリンピック派遣委員長が出席した。政治的な議論はしないという約束のもと、まずIPhO本部がベラルーシ組織委員会に対して、オンライン大会に必要な強靱なインターネット環境、実験キットを各国に配送する国際宅配便の状況、参加登録費を世界中からベラルーシに送金するための国際的な銀行送金の状況などを質問し、IPhO大会を実施できる状況にないことが報告された。また、4月1日までにベラルーシ大会参加登録をした国・地域は約85か国のうち54か国・地域にとどまったことも報告された。議論のあと、採決が行われ、ベラルーシ大会中止に賛成68票、反対22票、棄権18票となり、中止が決定された。そのあと、代替大会を他の国で開催するか議論し、そのなかでスイスの役員が手を挙げ、エストニアと協力しながらスイス主催で代替大会を開催することが決定された。彼らはヨーロッパ物理オリンピックを毎年開催している経験を活かし、わずか3か月で準備するというボランティアを買って出たわけで、そのチャレンジ精神に出席役員たちから大きな拍手が沸いた。

IPhO2022代替スイス大会への参加

代替大会とはいえ、日本代表選手たちが今まで培ってきた実力を国際的な舞台で発揮できる場が復活したことは大変うれしいことで、われわれJPhOとしても積極的に参加を表明した。日本チームは大学セミナーハウスに集まり、スイスとインターネットで結んで、7月11日と13日に、5時間におよぶ実験試験と理論試験に参加する。

東ヨーロッパのある国から、IPhOからロシアとベラルーシチームを排除すべきとの提案がなされたが、まだ国際役員会議で採決されていない。また、つい最近になって代替スイス大会の参加国リストが配布されたが、そのなかにロシアとベラルーシが入っていることに反発し、ポーランドチームがボイコットを表明した。7月の大会まで、まだ越えなければならない壁がありそうだ。